

蔵王町文化財調査報告書

堀ノ内遺跡

1990 年 3 月

蔵王町教育委員会

堀ノ内遺跡

序

蔵王連峰の豊かな自然にいだかれた蔵王町には、縄文時代の「鍛冶沢遺跡」をはじめとして185箇所もの埋蔵文化財包含地が知られています。

これらの埋蔵文化財は、遠い祖先の生活の足跡であり、文字のない当時の生活を知る上で唯一の手掛かりとなるタイムカプセルとさえ言えるでしょう。

しかも、文化財は一旦壊してしまえば、二度と作ることのできない貴重な国民の共有財産です。

蔵王町教育委員会では、従来から社会教育の一環として文化財の保護に力を入れて来ました。豊かで住みよいふる里づくりのためにはその歴史を正しく理解し、後世に伝えていかなければならないからです。

今年で5回目になる「縄文体験学習」もこれからの時代を担う子供たちに歴史への関心をいだかせるとともに文化財の大切さを育む、歴史教育の普及・啓蒙活動の一環であります。

蔵王町では幼児教育の充実をはかるために永野幼稚園、平沢幼稚園につづいて円田幼稚園の建設を計画してまいりました。

しかし、建設の該当地が周知の遺跡である「堀ノ内遺跡」の範囲内にあたるため、幼稚園建設が遺跡に及ぼす影響が最少にとどまるよう、県教育委員会文化財保護課と協議して、4月24日から5月17日までのおよそ一月のあいだ発掘調査を実施いたしました。

今回発刊する蔵王町文化財調査報告書は、円田地区の「堀ノ内遺跡」の発掘調査の結果をまとめたものです。

末筆ではありますが、本調査を行うにあたりご協力いただきました関係の方々に深甚なる感謝を申し上げるとともに、この報告書が本町古代史の解明にお役に立つことを祈念いたします。

平成2年3月

蔵王町教育委員会 教育長 佐藤 廣志

目 次

序	蔵王町教育委員会 教育長 佐藤 廣志
調査要項・例言	
I. 遺跡の位置と環境	1
II. 周辺の遺跡	1～4
III. 調査の方法と経過	4～5
IV. 発見された遺構と遺物	5～17
・ 竪穴住居跡 ・ 掘立柱建物跡 ・ 土壇 ・ その他の遺構	
V. 考 察	17～20
VI. まとめ	20
引用・参考文献	21
写真図版	23～28

調 査 要 項

遺跡所在地：宮城県刈田郡蔵王町円田字堀ノ内

遺 跡 記 号：M I 遺跡登録番号 0 2 0 8 4

調 査 期 間：1989年4月24日～5月17日

発 掘 面 積：約2000m²

調査主体者：蔵王町教育委員会

調査担当者：蔵王町教育委員会・宮城県教育委員会文化財保護課

調 査 員：白鳥良一 真山悟 菊地逸夫 古川一明 吉田雅之 大和幸生

例 言

1. 本書は蔵王町立円田幼稚園建設に伴う、堀ノ内遺跡の調査成果をまとめたものである。
2. 調査の主体は、蔵王町教育委員会であり、担当者は宮城県教育委員会文化財保護課である。
3. 本書の第1図は国土地理院発行の1/25000 「村田」を使用した。
4. 土色の観察は小山・竹原編「新版標準土色帖」を基準とした。
5. 発掘調査の記録や整理に関する資料および出土品については、宮城県教育委員会が保管している。
6. 本書の執筆、編集は文化財保護課員の協議を経て、菊地逸夫が担当した。

I 遺跡の位置と環境

堀ノ内遺跡は、宮城県刈田郡蔵王町円田字堀ノ内に所在し、蔵王町役場より北東方向約2kmの円田小学校北西側の地点に位置している。

本遺跡の所在する蔵王町は、宮城県の南西部、刈田郡の北東部にあたり、蔵王山の東麓に位置して、東西に長い地域となっている。

町内の地形を見ると、町の大部分は蔵王火山地の東麓にのびて広がる高館丘陵によって占められ、この丘陵の北西部は高木丘陵、東端で南側に張り出している部分は愛宕山丘陵とそれぞれ呼ばれ、後者は頂部で村田町との境を画している。この高館丘陵は、白石川の支流である松川及び藪川によって開析され、その流域には、両河川によって、中、下位の河岸段丘や扇状地が形成されており、白石低地の北東部を構成している。その中で円田地区は、南を除く三方を丘陵によって挟まれた盆地状を呈し、円田盆地と呼称されている。この円田盆地の北・西縁の高木丘陵には、藪川によって形成された中、下位の河岸段丘が発達し、盆地中央部には氾濫原が広がっている。一方、盆地東縁の愛宕山丘陵麓には段丘の発達が認められず、藪川の東と西では、非対称的景観をなしている。

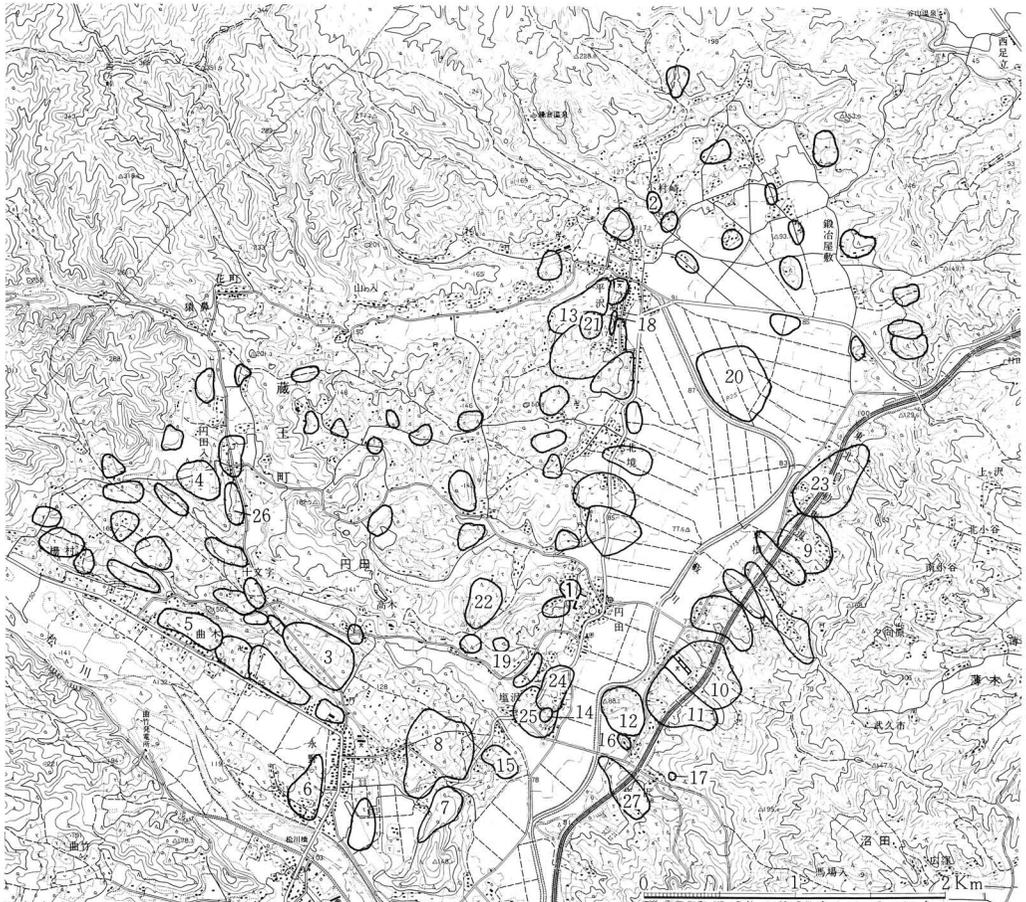
本遺跡は、この円田盆地西縁に接する高木丘陵麓の北東向きの斜面に立地している。

II 周辺の遺跡（第1図）

蔵王町には現在185箇所の遺跡が確認されており（県教委1985）、旧石器時代から中・近世に至るまでの、連続とした人々の生活の痕跡が数多く残されている。これらの遺跡の多くは、青麻山の東麓や松川・藪川により形成された河岸段丘や高木丘陵、愛宕山丘陵の丘陵麓に立地しており、稀に沖積地にも認められる。

本遺跡の所在する円田盆地周縁地域の遺跡をみると、最も古い遺跡には盆地北西部の前戸内遺跡があり、旧石器時代後期の柳葉形尖頭器が出土している。縄文時代の遺跡は高木遺跡、湯坂山B遺跡、曲木遺跡などのように高木丘陵上に立地しているものが多く、盆地周縁にはあまり認められていない。しかし、弥生時代になると、その遺跡数は急増している。遺跡としては中期後葉の「円田式」（伊東：1960）の標式遺跡である西浦遺跡を始めとして下永野遺跡、上野遺跡などがあり、この周辺は白石低地の中で、最も弥生時代の遺跡の多い地域である。

古墳時代の遺跡には大橋遺跡（太田：1980）や伊原沢下遺跡（蔵王町：1985）、諏訪館前遺跡（相原：1989）、台遺跡（齊藤：1989）、塩沢北遺跡（小川：1980）があり、台遺跡からは古墳時代中期の筏地業を施した大規模な畦畔と溝をもつ水田跡をはじめとして、その前後9時期にわたる水田跡が検出されている。また、本地域の南辺部には宋膳堂古墳や天王古墳などの埴輪をもつ古墳を始め西脇古墳、中屋敷古墳、八幡山古墳などの高塚古墳が点在している。横



No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	堀ノ内遺跡	縄文・古墳～平安	10	伊原沢下遺跡	古墳	19	八幡山古墳	古墳
2	前戸内遺跡	旧石器・縄文	11	塩沢北遺跡	弥生・古墳～平安	20	郡遺跡	弥生・古墳～平安
3	高木遺跡	縄文(早・中)	12	合遺跡	古墳～平安	21	殿跡遺跡	中世
4	湯坂山丘遺跡	縄文(中・後)	13	殿跡前遺跡	弥生・古墳～平安	22	花輪館遺跡	中世
5	山本遺跡	縄文(中)・弥生	14	宗勝堂古墳	古墳	23	赤鬼上遺跡	弥生・平安
6	西南遺跡	縄文(中)・弥生	15	天王古墳群	古墳	24	宗勝堂遺跡	弥生・古墳～平安
7	下永野遺跡	弥生	16	西脇古墳	古墳	25	戸の内脇遺跡	縄文・平安・中世
8	上野遺跡	縄文・古墳～平安	17	中屋敷古墳	古墳	26	湯坂山遺跡	縄文(早・前)
9	大橋遺跡	弥生・古墳	18	殿跡前南横穴群	古墳	27	大山遺跡	弥生・古墳

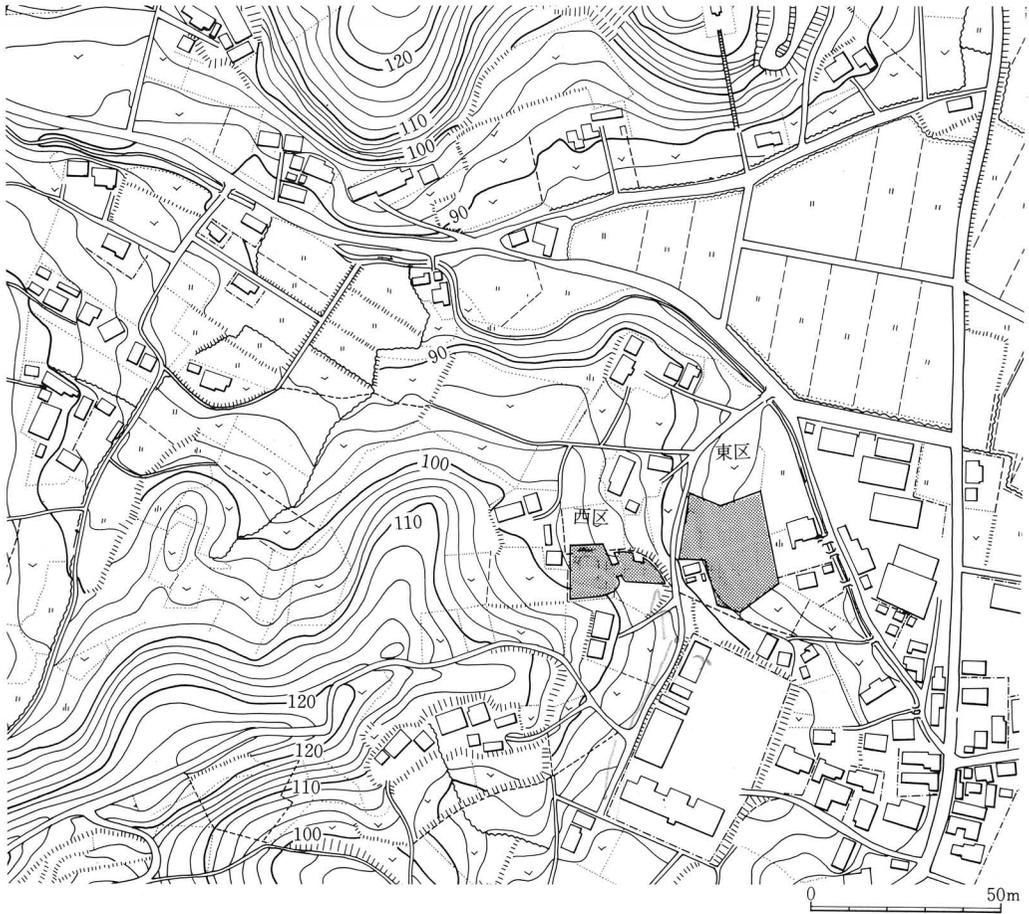
第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

穴墓については、平沢諏訪館地域に十数基が発見されているが、詳しい内容については不明である。

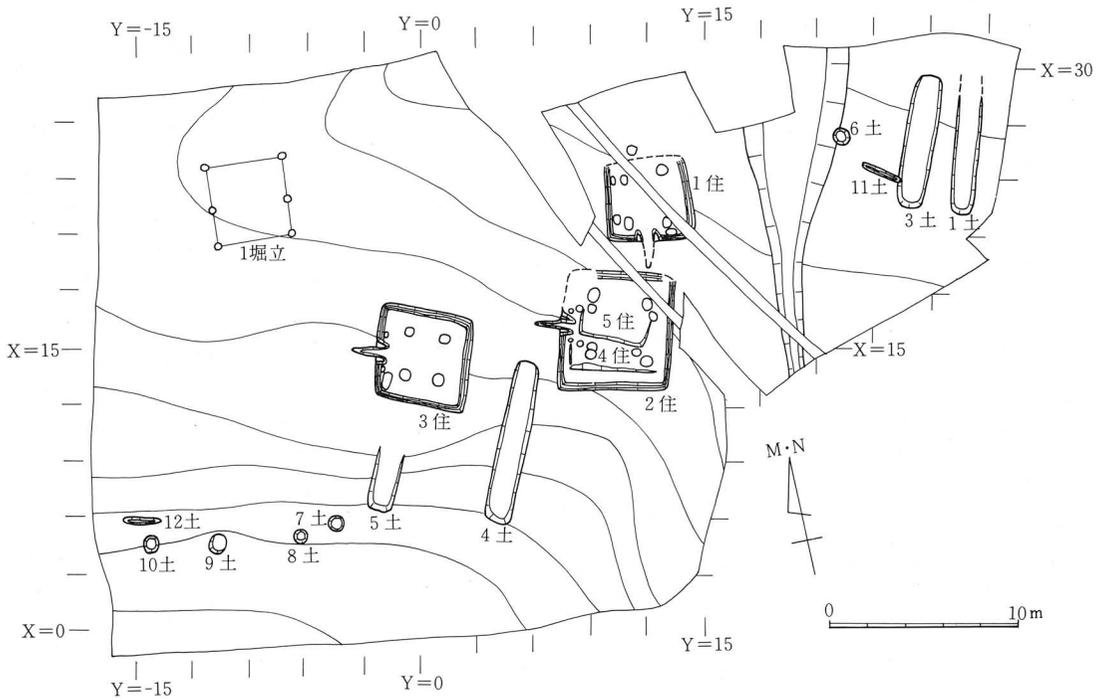
古墳時代以降の遺跡は赤鬼上遺跡(黒川:1980)、都遺跡、戸の内脇遺跡(斉藤:1989)などがある。この時代の遺跡は爆発的に増加しており、前時代までの遺跡の少ない盆地北辺部や沖積地にまで、その存在が認められる。中でも沖積地に立地している都遺跡からは、多賀城I期以前と考えられる凸面格子叩きの平瓦や行基式の丸瓦(凸面ケズリ)が多数出土しており、刈田郡衙の可能性を指摘する説もある(蔵王町:1985)。また、戸の内脇遺跡からは平安時代の水田跡が検出されている。

中世の遺跡には、諏訪館、花楯館などの館跡の存在が確認されており、これらの多くは盆地北縁部の、盆地全体を眺望できるような要衝の地に立地している。

以上のように本遺跡の立地する円田盆地周縁地域には、弥生時代以降に遺跡が増加してくる



遺跡周辺の地形と調査区



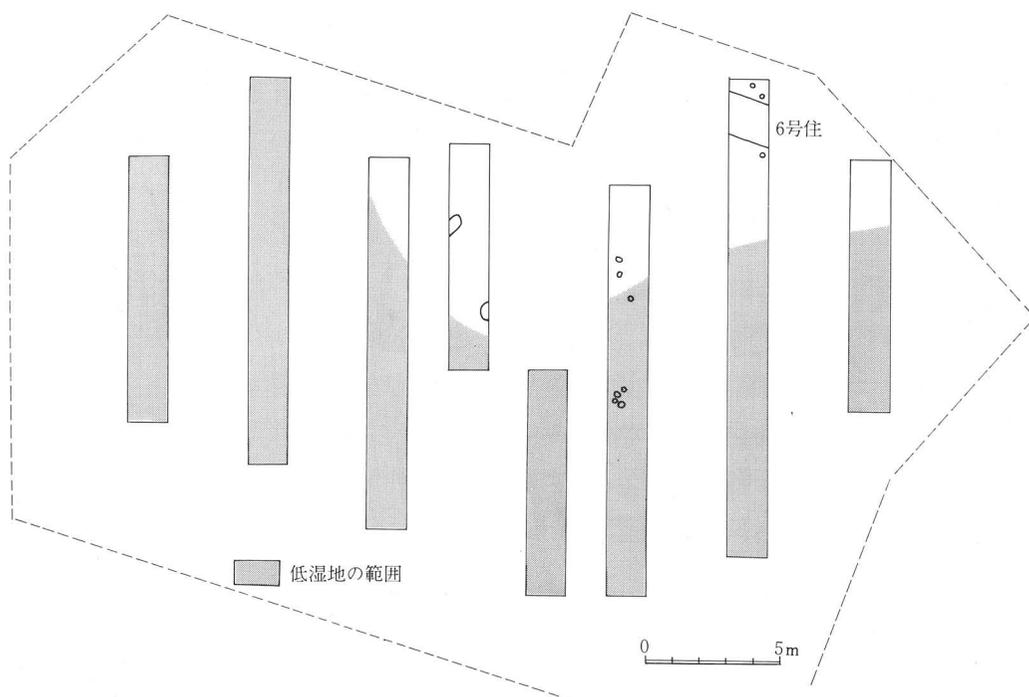
第2図 西区遺構配置図

ことがわかる。このことは、縄文時代の採集経済から農耕への生活基盤の転換という中で捉えられ、弥生時代以降の円田盆地の人々の歴史は、円田盆地の開墾の歴史とも言い換えられよう。また、古墳時代以降は養老5年（721）に刈田郡が分置されているなど古くから律令体制に組み入れられた地域であったと考えられる。

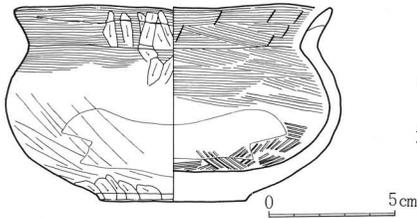
III 調査の方法と経過

蔵王町では、平成2年4月の開園をめざして、円田幼稚園の建設を計画していたが、建設予定地となったのは堀ノ内遺跡として周知された地域の範囲内にあたるため、同町では幼稚園建設が遺跡に及ぼす影響を最小にとどめるよう用地を選定することとした。つまり、円田小学校西側の町道をはさむ東西2ヶ所を候補地とし、確認調査によって遺構の分布状態を把握した後に、影響の少ない地区を幼稚園建設地とし、事前調査を実施することとした。

両地区について3～6m間隔で3m幅のトレンチを設定して遺構の確認調査を行った結果、検出された遺構は、東区で竪穴住居跡1軒、西区で竪穴住居跡3軒というように東西両区では遺構の分布にあまり差異が認められないことから、蔵王町では諸条件を加味した上で西区に幼稚園を建設することとした。そこで、現状保存となる東地区については平板測量を行って埋め戻し、事前調査の対象となる西区については、敷地全体の表土を除去して遺構の精査を行った。



第3図 東区トレンチ配図



第4図 第6号住居跡出土遺物

東側調査区の概要（第3図）

東側調査区については3～6m間隔で、長さ15～40mのトレンチ8本を調査した。調査区の地形は丘陵末端部の盆地沖積地への落ち際にあたり、東に向かって傾斜している。

表土を除去した結果東側に行くにつれて黒ボク土の堆積が厚くなり、地表で観察された以上に傾斜が急激であることが観察された。遺構の存在の可能性がある比較的傾斜の緩やかなローム面が検出されたのは調査区の北西部のみである。遺構は北から2番目の調査区から古墳時代中期頃と考えられる竪穴住居跡（第6号住居）が1軒検出されたほかは、小さなピットが数個検出されたにすぎない。

調査期間は4月24日～5月17日、発掘面積は約2000㎡で、5月13日に地元小中学校と地域住民を対象とした現地説明会を行った。

なお、確認調査のみで終了した東側調査区についての概要は次のとおりである。

IV 発見された遺構と遺物

西側調査区から検出された遺構には、竪穴住居跡5軒・掘立柱建物跡1棟・土壇12基などがあり、住居及び土壇からは土師器・須恵器や表土から縄文土器・弥生土器の小片などが出土している。以下、順に記述していく。

なお、調査区の基本層位は第1層が表土の耕作土（黒褐色土）、第2層が黒ボク土（黒色土）第3層がローム（褐色土）で、第3層の上面は第2層の影響を受け、黒褐色を呈している。

竪穴住居跡

第1号住居跡（第5図）

〔遺構の確認〕 グリッドH～Jの10～11区の第2層上面で検出された。

〔重複〕 重複はないが、南東隅から北西隅にかけて水道管埋設のため攪乱を受けている。

〔平面形・規模〕 北壁は削平されているが、床面の残存状態からほぼ正方形を呈するものと考えられる。規模は一辺約4.5mである。

〔堆積土〕 黒褐色の自然流入土が床面を直接覆う。4は周溝内堆積土である。

〔床面・壁〕 暗褐色の地山面（ロームへの漸位層）を床面としている。ほぼ平坦で、東側の部分につき固められている。壁は周溝底面からほぼ垂直に立ち上がり、壁高は保存のよい南西壁で約30cmである。

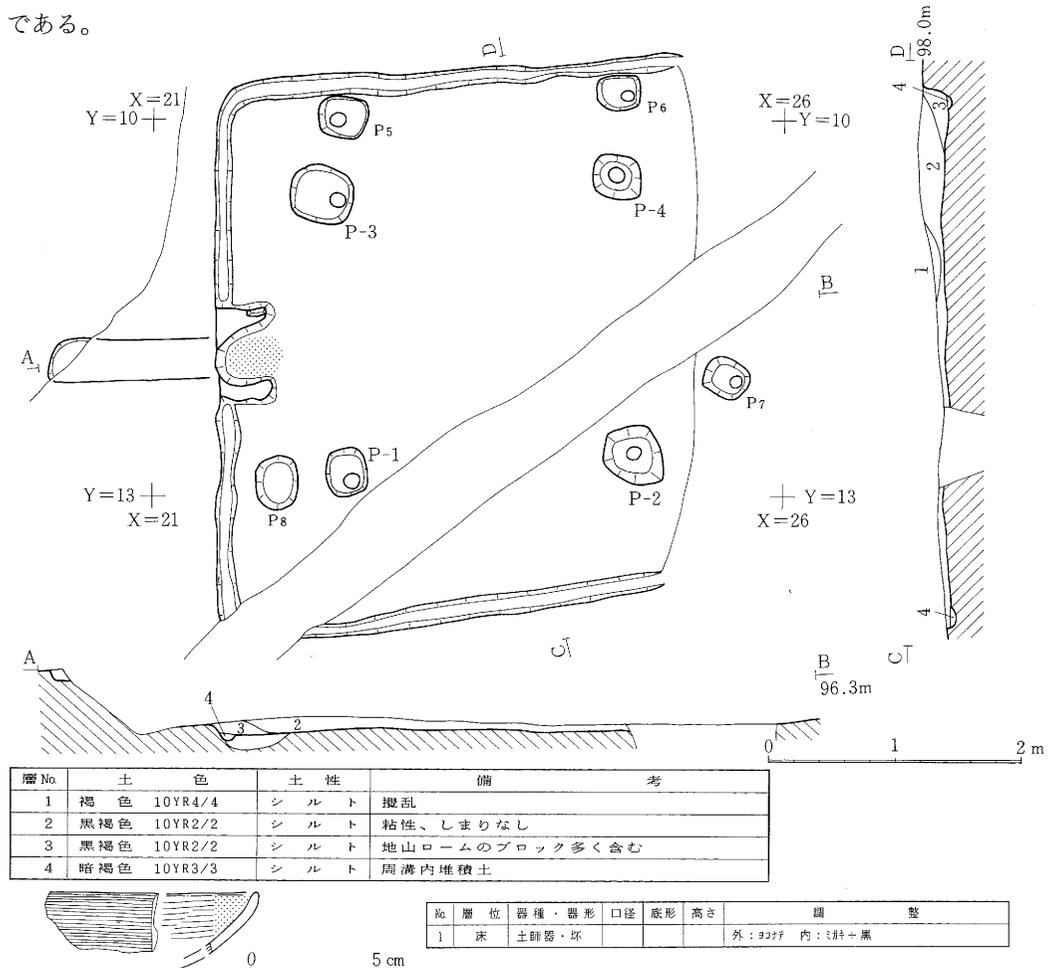
[カマド] 南壁のほぼ中央部に付設されており、燃焼部と煙道部の先端が検出された。燃焼部側壁および底面は白色の粘土で作られている。底面は火熱により赤変しており、白色粘土を除去した段階で周溝が検出された。したがって、この住居が使用されていた当時は、周溝はカマド部分で暗渠になっていたものと考えられる。煙道は長さ約1.3mあり、先端部のレベルは燃焼部底面よりも約60cm高くなっている。

[柱穴] 床面から6個のピットが検出され、それらの中でP1～4は1間×1間で柱間約2.2m等間に配置されており支柱穴と考えられる。また、他に西側周溝付近の床面から2つのピット(P-5,P-6)が検出されており、支柱穴の可能性もある。柱穴は一辺40～60cmの方形で、深さ30～50cmあり、すべての柱穴から直径10～15cmの円形の柱痕跡が検出された。

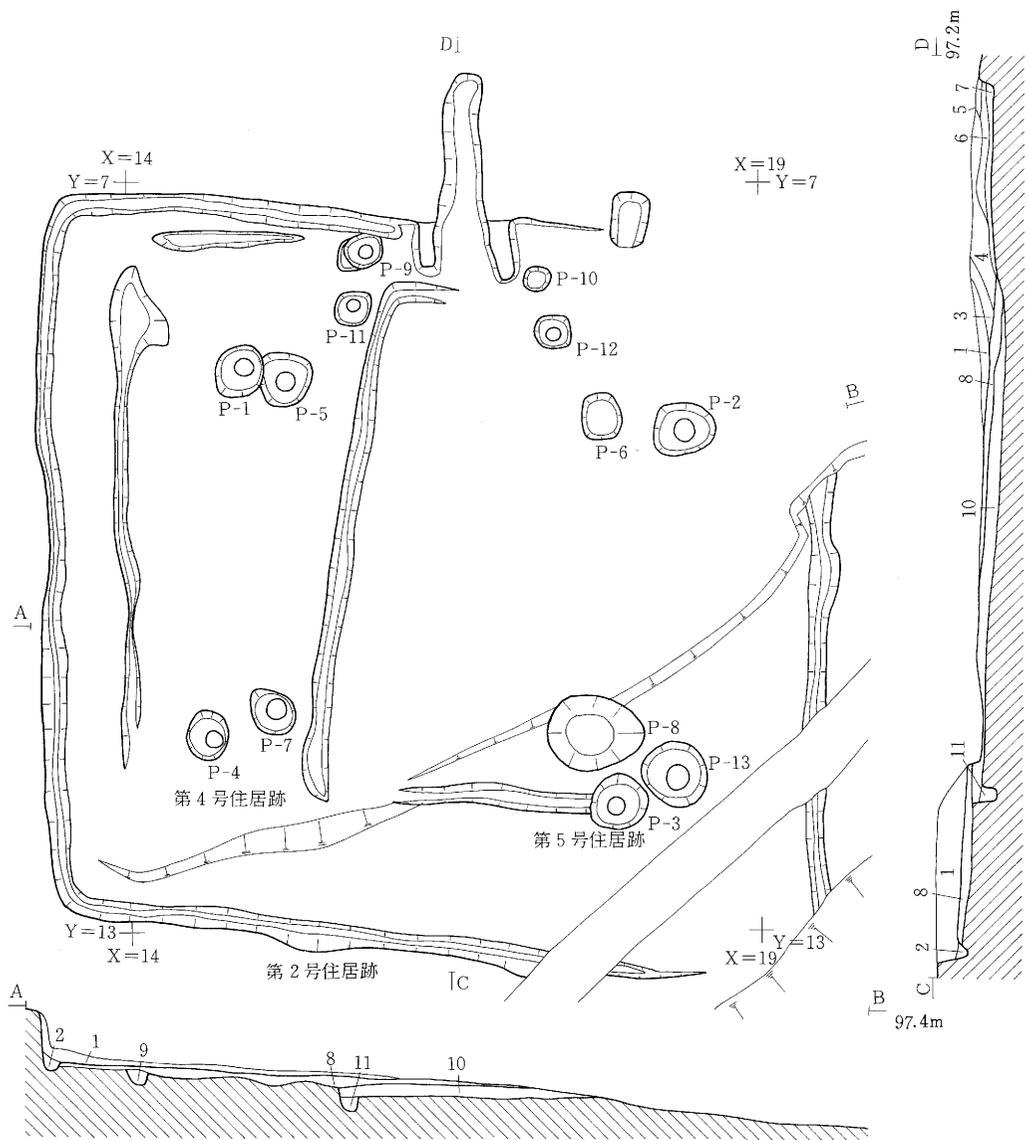
[周溝] 壁直下で検出された。幅10～20cm、深さ4～10cmで、断面形はU字状である。

[床面の施設] 住居南西隅近くのカマド燃焼部左側から径約40cm、深さ約10cmのピット(p-8)が検出されており、位置的に貯蔵穴の可能性はある。

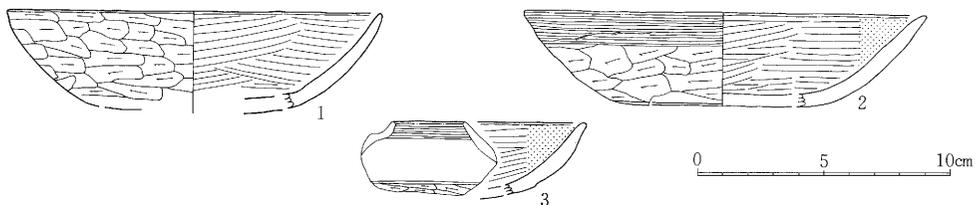
[出土遺物] 堆積土や床面から土師器甕、坏が検出されているが、図示できたものは1点のみである。



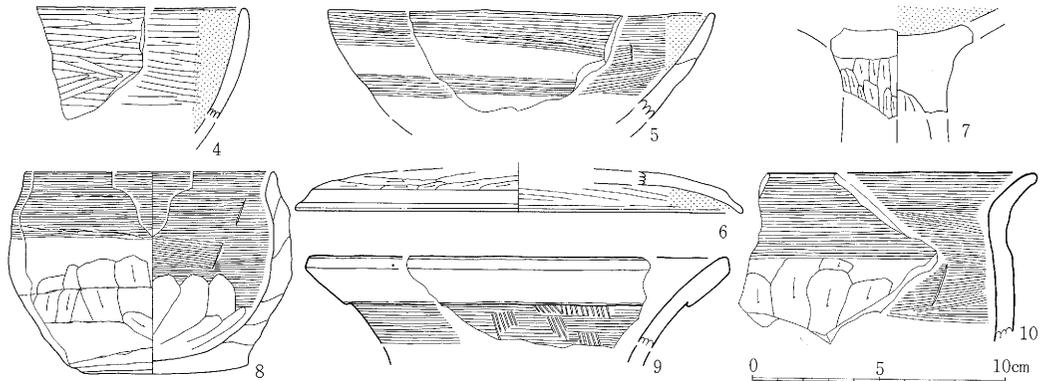
第5図 第1号住居跡と出土遺物



層No	土色	土性	備考
1	黒褐色 10YR2/2	シルト	バサバサしてしまらない
2	暗褐色 10YR3/3	シルト	周溝内堆積土
3	暗褐色 10YR3/2	シルト	燻土を少し含む
4	暗赤褐色 10YR3/6	シルト	燻土を非常に多く含む
5	黒褐色 10YR2/2	シルト	
6	暗褐色 10YR3/3	シルト	炭化物多い
7	暗褐色 10YR3/2	シルト	炭化物を多く含む
8	褐色 10YR3/2	シルト	地山ブロック多く含む、貼り床
9	暗褐色 10YR3/3	シルト	4号住居周溝内堆積土
10	暗褐色 10YR3/4	シルト	炭化物を多く含む、5号住居土
11	黒褐色 10YR2/2	シルト	5号住居周溝内堆積土



第6図 第2・4・5号住居跡と出土遺物



No.	層位	器種・器形	口径	底形	高さ	調 整	そ の 他
1	掘り方	土師器・坏	15.0			外：ヘラズリ 内：ミガキ+黒?	火熱を受けている
2	掘り方	土師器・坏	16.0	8.9	3.7	外：ヘラズリ+ヨコナデ 内：ミガキ+黒	
3	掘り方	土師器・坏				外：上ヨコナデ、下ヘラズリ 内：ミガキ+黒	
4	掘り方	土師器・坏				外：ミガキ+黒 内：ミガキ+黒	
5	1	土師器・坏	15.4			外：ヨコナデ 内：ヨコナデ+黒	
6	1	土師器・蓋	17.8			外：ヘラズリ 内：ヨコナデ+黒	ロクロ使用?
7	1	土師器・高坏				脚部外：ヘラズリ 坏部内：ミガキ+黒	
8	1	土師器・碗	9.9	6.6	8.1	外：上ヨコナデ、下ヘラズリ 内：ヘラズリ、ヘラナデ	
9	1	土師器・甕	17.0			外：ハケ+ヨコナデ	
10	掘り方	土師器・甕				外：上ヨコナデ、下ヘラズリ 内：ヨコナデ、ヘラナデ	

第7図 第2号住居跡出土遺物

第2号住居跡 (第6、7区)

〔遺構の確認〕グリッドFGHの9～11区の第2層上面で確認された。

北半は削平のため残存状況が悪く北側は周溝のみ検出された。

〔重複〕第4・5号住居と重複しており、これらの中で最も新しい。第4号住居を拡張した住居である。

〔平面形・規模〕隅丸方形で、規模は東西軸約6.0m、南北軸約5.8mである。

〔堆積土〕全体に厚くしまりのない黒色土が堆積している。2は周溝内堆積土、3～7はカマド堆積土で、4は燃焼部天井の崩れである。

〔床面・壁〕床面は、掘り方に地山のロームを多く含む土を入れ固めた、貼り床である。

全体的に平坦で、中央部は非常に固くしまっている。壁は、南壁はロームを、東西壁は第2層の黒ボク土もしくはロームを壁としている。周溝底面から垂直に立ち上がり、最も保存のよい南壁で床面から約40cmある。

〔カマド〕カマドは西壁のほぼ中央部に付設されている。燃焼部の側壁は白色の粘土を積み上げて構築されている。煙道は1.2mあり、燃焼部底面から煙道先端に向かって緩やかに上がっていく。

〔柱穴〕床面及び、床面下から多数のピットが検出され、それらの中でP1～4は配置から主柱穴と考えられる。柱間は東西約3.0m、南北がP1・P2間で3.5m、P3・P4間で3.2mである。柱穴は直径約50cmの円形で、深さ30～40cmあり、すべてのピットから径約15cmの柱痕跡が検出された。また、P9・P10はカマド側壁の左右対象の位置から検出され支柱穴と考えられ

る。

〔周溝〕カマド燃焼部を除く壁直下で検出された。西壁の北半では認められなかったが、削平を受けており本来は存在した可能性もある。幅15～25cm、深さは深い所で約10cmあり、断面形はU字形である。

〔出土遺物〕堆積土、および床面から土師器坏、甕が出土している。1～4は床面下の掘り方から出土したものである。

第4号住居跡

〔遺構の確認〕FGHの9～11区に位置する。第2号住居の貼床をはずした段階で南壁から西壁にかけての周溝が検出された。

〔重複〕第2・5号住居と重複しており、第2号住居の拡張前の住居である。新旧関係は第5号住居→第4号住居→第2号住居となる。

〔平面形・規模〕住居跡のほとんどが失われており、全体の形状は不明であるが、残存部から方形を基調としていると考えられる。規模については不明である。

〔堆積土〕暗褐色の周溝内堆積土が1層認められたのみである。

〔床面・壁〕床面は、地山のロームで、北半は5住の堆積土を床としている。壁は検出されなかった。

〔柱穴〕床面から多数のピットが検出され、それらの中でP5～8は配置から支柱穴と考えられる。柱間は等間で東西、南北とも2.5mある。柱穴は直径40～60cmの円形で、深さ30～50cmあり、P5とP7から径約15cmの柱痕跡が検出された。また、P11と12は2住のP9とP10にそれぞれ対応する位置で検出されており、支柱穴と考えられる。

〔周溝〕残存状態は悪く、南側の部分が検出されたのみである。断面形はU字状で、幅5～20cm、深さは深い所で約5cmある。

第5号住居跡

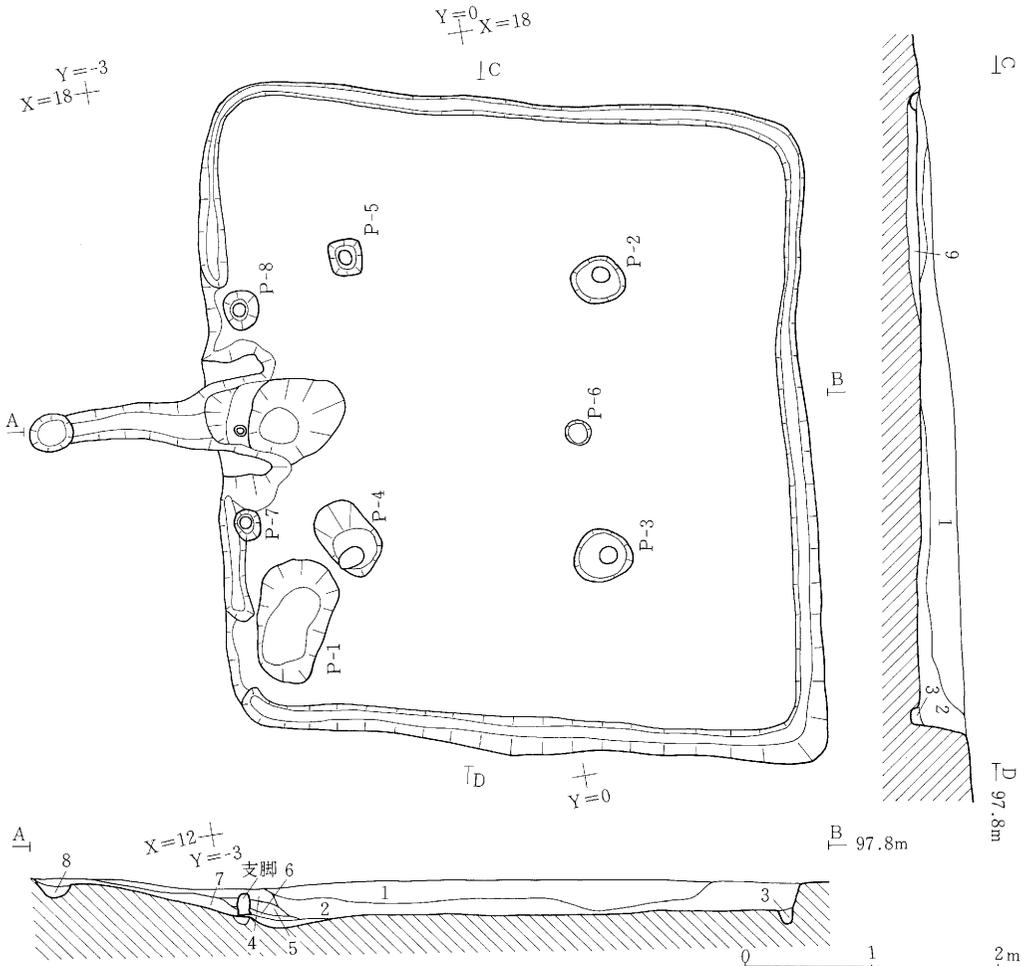
〔遺構の確認〕FGHの9～11区に位置する。第2号住居の貼り床をはずした段階で、南側は第3層で北側は第2層で確認された。北半は削平のため失われている。

〔重複〕第2・4号住居と重複しており、これらの中で最も古い。

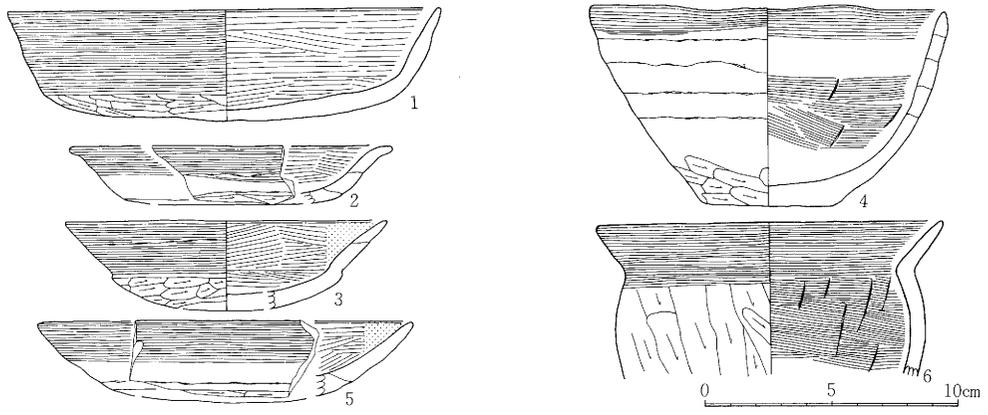
〔平面形〕北半は削平されているが、残存部の様子から方形と考えられる。規模は東西約4.2m、南北は残存部で2.3mである。

〔堆積土〕全体にしまりのない暗褐色土が1層堆積している。11は周溝内堆積土である。

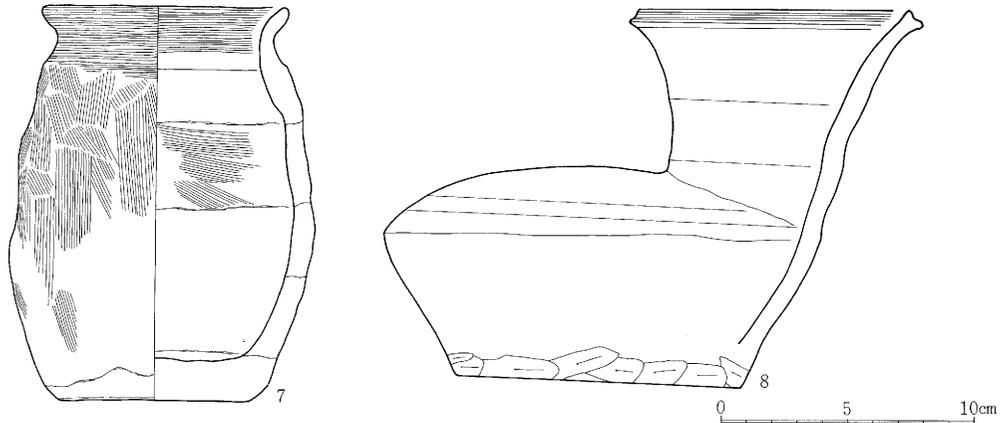
〔床面・壁〕床面は、掘り方に地山のロームを多く含む土を約5cm入れて固めた貼り床である。



層No.	土色	土性	備考
1	黒褐色 10YR2/2	シルト	バサバサしてしまらない、地山粒少し含む
2	黒褐色 10YR3/2	シルト	地山粒や焼土を少し含む
3	暗褐色 10YR3/3	シルト	周溝内堆積土
4	暗褐色 7.5YR3/3	シルト	焼土を少量含む
5	赤褐色 5YR4/8	シルト	カマド天井部崩落土
6	明赤褐色 5YR5/8	シルト	カマド天井部崩落土
7	暗褐色 10YR3/3	シルト	焼土を少し含む
8	黒褐色 10YR2/2	シルト	
9	暗褐色 10YR3/3	シルト	貼り床埋め土



第8図 第3号住居跡と出土遺物



No.	層位	器種・器形	口径	底形	高さ	調	整	その他
1	床	土師器・坏	17.2		4.4	外：上ヨコナデ、下ハラケスリ	内：ミガキ	
2	床	土師器・坏	12.8	8.5	2.4	外：上ヨコナデ、下ハラケスリ	内：ミガキ	
3	床	土師器・坏	12.8		3.7	外：上ヨコナデ、下ハラケスリ	内：ミガキ＋黒	
4	床	土師器・碗	14.2	5.2	7.9	外：上ヨコナデ、下ハラケスリ	内：ヨコナデ、ハラナデ	
5	1	土師器・坏	14.9		3.3	外：上ヨコナデ、下ハラケスリ	内：ミガキ＋黒	
6	床	土師器・甕	13.8			外：ハラケスリ＋ヨコナデ	内：ハラナデ、ヨコナデ	
7	カマド	土師器・甕	9.7	7.4	15.7	外：上ヨコナデ、下ハラナデ	内：ハラナデ、ヨコナデ	支脚として使用
8	床	須恵器・平瓶	10.8	11.3	15.0	外：ロクロ	下ハラケスリ	

第9図 第3号住居出土遺物

全体的に平坦で、中央部は非常に固くしまっている。壁はロームで、周溝底面から垂直に立ち上がり、最も保存のよい南壁で床面から約10cmある。

〔カマド〕住居の西側にあたる部分で長円形の焼土を含む落ち込みが検出されており、煙道の先端部であると考えられる。燃焼部は検出されなかった。

〔柱穴〕検出されなかった。

〔周溝〕壁直下で検出された。断面形はコ字形で、幅は15～25cm、深さは深い所で約10cmある。

第3号住居跡（第8、9図）

〔遺構の確認〕グリッドG5～7、F6、7、E7区の第2層上面で検出された。

〔平面形・規模〕平面形は、平行四辺形ぎみの不正の隅丸方形で、規模は東西軸約4.7m、南北軸約5.1mある。

〔堆積土〕2層に大別でき、すべて、自然流入土と考えられる。3は周溝内堆積土、4～8はカマド内堆積土、9は掘り方埋土である。

〔床面・壁〕全面にローム混じりの暗褐色土の貼床を施している。厚さは約5cm程度で、南側の部分は固くしまっている。壁は、南壁はロームを、東西壁はロームもしくは黒ボク土を壁としている。周溝底面から垂直に立ち上がり、最も保存のよい南東隅で床面から約70cmある。

〔カマド〕住居西壁のほぼ中央部に付設されており、燃焼部と煙道部が検出された。燃焼部の側壁と底面は白色粘土で作られており、側面から底面にかけては火熱により赤変している。底面には小形の土師器甕が支脚として据えられてあり、白色粘土を除去した段階で周溝が検出さ

れた。したがって、この住居が使用されていた当時は、周溝はカマド部分では暗渠になっていたものと考えられる。煙道部は、長さ約1.4mあり、底面は奥壁からゆるやかに上がり、先端には径約30cmの煙出し孔が取りつく。

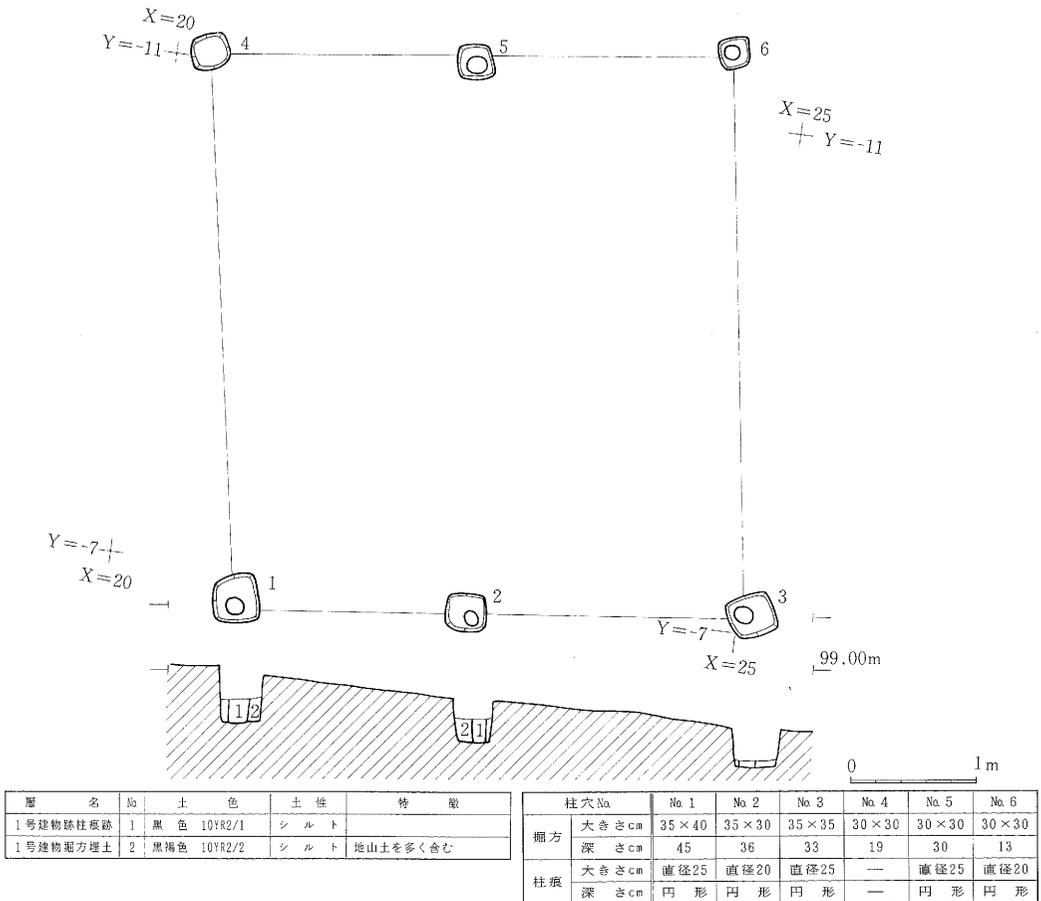
〔柱穴〕床面から、8つのピットが検出され、それらの中でP2～5は配置や柱痕跡から支柱穴と考えられる。柱間は東西約2.0m、南北約2.3mである。柱穴は一辺約40cmの方形ないし円形で、深さ30～60cmあり、すべてのピットから径約15cmの柱痕跡が検出された。

また、P7とP8はカマド側壁の左右対象の位置にあり、支柱穴と考えられる。

〔周溝〕壁直下を全周する。断面形はU字形で、幅10～20cm、深さ2～10cmある。

〔床面の施設〕住居南西隅から貯蔵穴(P1)が検出された。長軸98cm、短軸58cm、深さ34cmで、隅丸方形である。底面が2段になっており、下の段から白色粘土のブロックが検出された。

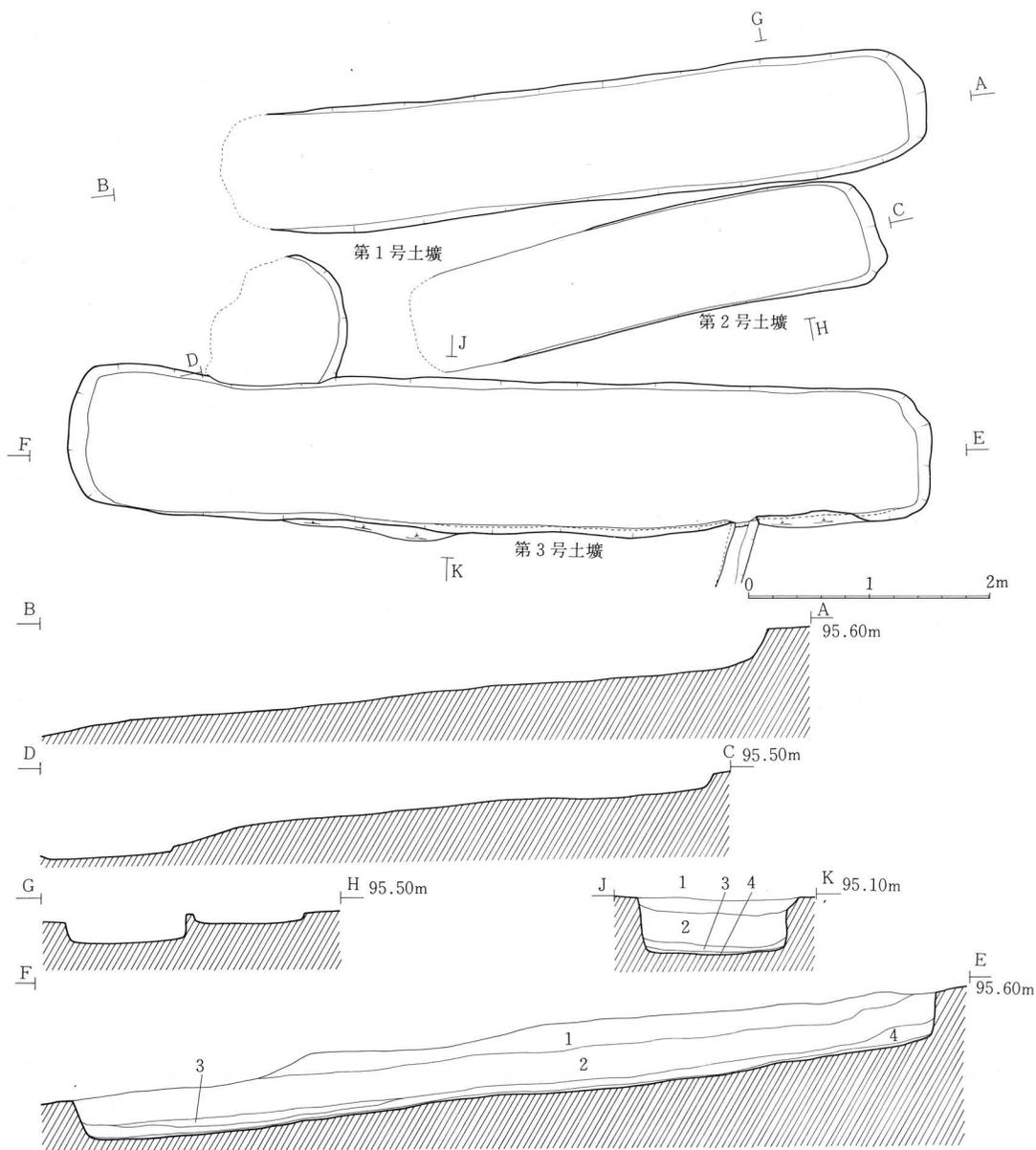
〔出土遺物〕カマド内から土師器甕が、床面から土師器坏、完形の須恵器平瓶が出土している。



第10図 第1号掘立柱建物跡

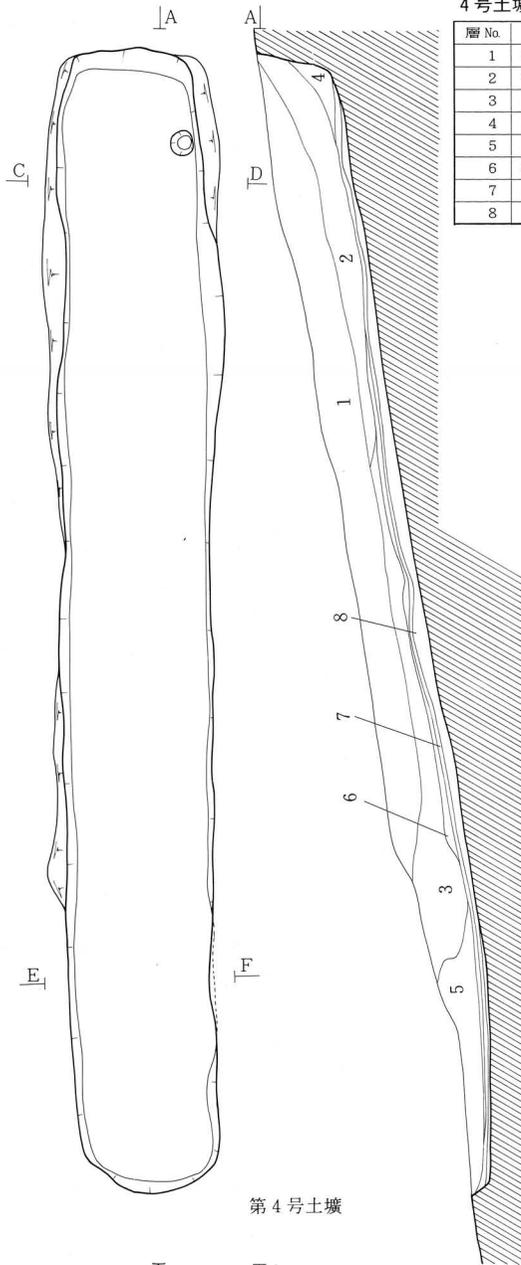
第1号掘立柱建物跡 (第10図)

竪穴住居跡群のやや北西、H～Jの3、4区付近の第2層で確認された。東西1間、南北2



層No.	土色	土性	特徴
1	暗褐色 10YR3/3	シルト	地山粒を含む
2	褐色 10YR4/4	砂質シルト	
3	黒褐色 10YR2/3	シルト	
4	暗褐色 10YR3/3	シルト	地山粒を含む

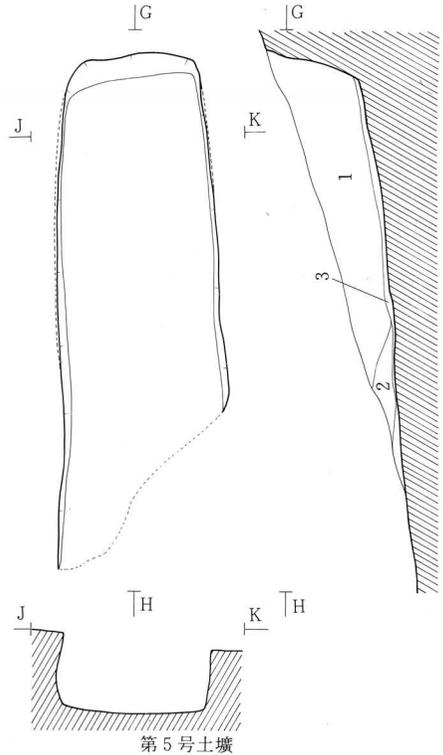
第11図 土坑1



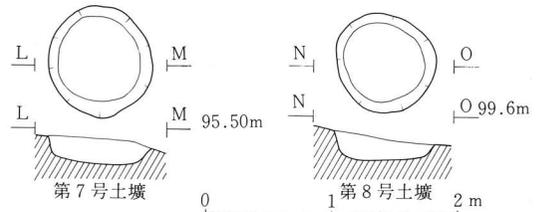
第4号土壌

4号土壌堆積土

層No.	土色	土性	特徴
1	暗褐色 10YR3/3	シルト	地山粒を含む
2	褐色 10YR4/4	砂質シルト	
3	黒褐色 10YR2/3	シルト	
4	暗褐色 10YR3/3	シルト	地山粒を含む
5	黒褐色 10YR2/2	シルト	
6	なまひ 黄褐色 10YR4/3	シルト	地山粒を含む
7	黒色 10YR2/1	シルト	炭化物を含む、粘性あり
8	黒褐色 10YR2/2	シルト	地山粒を含む

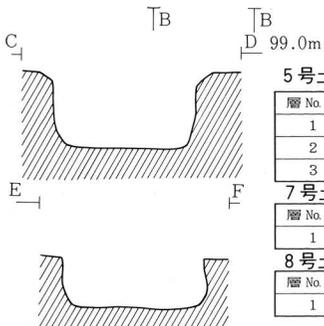


第5号土壌



第7号土壌

第8号土壌



99.0m

5号土壌堆積土

層No.	土色	土性	特徴
1	黒褐色 10YR3/2	シルト	地山粒を含む
2	黒褐色 10YR2/3	シルト	地山粒を含む
3	黒色 10YR2/1	シルト	炭化物を含む、粘性あり

7号土壌堆積土

層No.	土色	土性	特徴
1	暗褐色 10YR3/3	シルト	地山粒を含む

8号土壌堆積土

層No.	土色	土性	特徴
1	暗褐色 10YR3/3	シルト	地山粒を含む

第12図 土壌2

間の建物跡で、規模は東側柱列で4.1m(2.2m+1.9m)南側柱列で4.4mある。方向は東側柱列でN 8° Eと、ほぼ磁北方向と一致する。柱穴は一辺30~40cmの方形で、深さは確認面から約40cmあった。柱痕跡はP 4を除くすべての柱穴で検出されており、直径12cm前後の円形をなす。

土壌

土壌は12基確認された。これらの中には形態的に類似するものもいくつかある。

ここでは、記載の反復をさける上で、これらを大まかに4つのタイプに分け、順に記していく。

- a：斜面に対し直交する方向に長軸を持つ長楕円形で、壁が内湾気味に立ち上がり、底面が傾斜しているもの。(第1~5号土壌)
- b：長方形もしくは楕円形を基調とし、壁がなだらかに立ち上がり、底面が平坦なもの。(第6, 9, 10号土壌)
- c：円形で、壁が比較的急角度で立ち上がり、底面が丸味をもつもの。(第7, 8号土壌)
- d：斜面に対し平行する方向に長軸を持つ長楕円形で、壁が直立気味に立ち上がり、底面が丸味をもつもの。(第11, 12号土壌)

aタイプ

第1号土壌(第11図)

調査区北東端の北向きの斜面(I~K-16)に位置する。第2号土壌に接しているが重複はしていない。斜面の下方にあたる北端部は失われているが、現存部の規模は長さ5.8m、幅1.0m、南端での深さ約30cmである。堆積土はしまりのない黒色土である。

第2号土壌(第11図)

調査区北東端の北向きの斜面(I~K-16)に位置する。第1, 3号土壌に接しているが重複はしていない。斜面の下方にあたる北端部は失われているが、現存部の規模は長さ5.8m、幅1.0m、南端での深さ約30cmである。堆積土はしまりのない黒色土である。

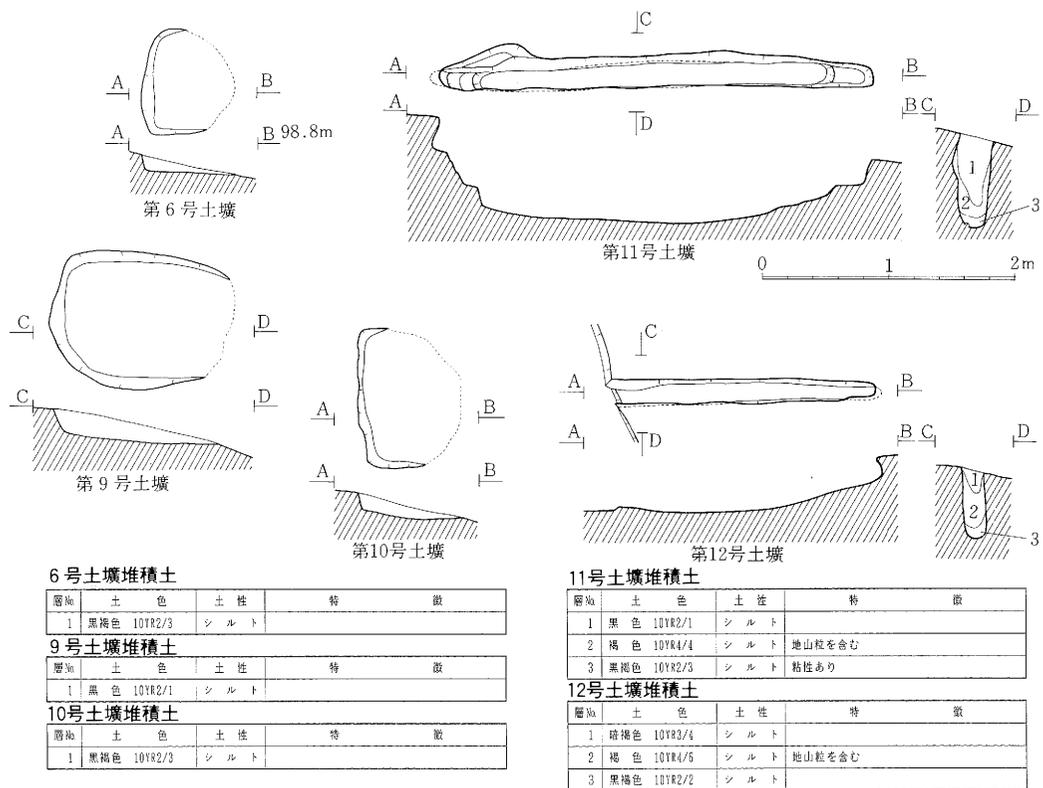
第3号土壌(第11図)

調査区北東端の北向きの斜面(I~K-15, 16)に位置する。第2号土壌に接しているが重複はしていない。斜面の下方にあたる北端部は失われているが、現存部の規模は長さ5.8m、幅1.0m、南端での深さ約30cmである。堆積土はしまりのない黒色土である。

第4号土壌(第12図)

調査区中央部の北向きの斜面(C~F-8)に位置する。他の遺構とは重複していない。

規模は長さ9.1m、幅1.3m、南端での深さ約60cmである。堆積土はしまりのない黒色土で底



第13図 土壙 3

面近くに炭化物の広がりが見られた。

第5号土壙 (第12図)

調査区中央部の北向きの斜面 (D~E-6) に位置する。他の遺構とは重複していない。斜面の下方にあたる北端部は失われているが、現存部の規模は長さ4.2m、幅1.3m、南端での深さは約70cmである。堆積土はしまりのない黒色土で底面近くに炭化物の広がりが見られた。

bタイプ

第6号土壙 (第13図)

調査区中央部の斜面の上方 (C-5) に位置する。他の遺構とは重複していない。斜面の下方にあたる北半は失われているが、現存部の規模は南北75cm、幅85cm、南端での深さは10cmである。堆積土は黒褐色土である。

第9号土壙 (第13図)

調査区中央部の斜面の上方 (C-3) に位置する。他の遺構とは重複していない。斜面の下方にあたる北半は失われているが、現存部の規模は南北1.5m、幅1.2m、南端での深さは20cmである。堆積土は黒褐色土である。

第10号土壙（第13図）

調査区中央部の斜面の上方（C-2）に位置する。他の遺構とは重複していない。斜面の下方にあたる北半は失われているが、現存部の規模は南北0.8m、幅1.1m、南端での深さは10cmである。堆積土は黒褐色土である。

c タイプ

第7号土壙（第12図）

調査区中央部の斜面の上方（C-5）に位置する。他の遺構とは重複していない。直径45cm、深さ20cmである。堆積土は黒褐色土である。

第8号土壙（第12図）

調査区中央部の斜面の上方（C-4）に位置する。他の遺構とは重複していない。直径45cm、深さ20cmである。埋め土は黒褐色土で、寛永通宝が出土している。

d タイプ

第11号土壙（第13図）

調査区南西部斜面の上方（C-1. 2）に位置する。他の遺構とは重複していない。規模は南北3.5m、幅25cm、深さ75cmである。

第12号土壙（第13図）

調査区北東端の北向きの斜面（J-14. 15）に位置する。第3号土壙と重複しており、これに切られている。現存部の規模は、東西2.1m、幅20cm、深さ50cmである。

その他の遺構

第1号住居跡の東側に南北方向の溝が検出された。斜面に直交し、高い方から低い方に下るにつれて幅が広がっている。性格等については不明である。

その他の遺物

遺構外の表土から弥生土器と縄文土器が出土している。いずれも小片で図示できないが、弥生土器は細い沈線を施文した深鉢で、「円田式」に位置付けられる可能性もある。縄文土器については地文のみで時期は限定できない。

V 考察

本項では、出土土器についてはその年代について、遺構については土壙と竪穴住居跡について若干の考察を加えていくこととする。

[出土土器]

出土した土器には、土師器坏・碗・甕、須恵器平瓶があるが、いずれも量的に乏しくこれらを分類し、その組み合わせに基づく土器群として捉えてことは困難である。そのため、ここでは、比較的遺物量の多い第3号住居跡出土遺物を1つのまとまりとして考え他遺跡と比較していくこととする。この場合、遺構に伴う遺物のみでは量的に不十分であるが、床面出土の遺物と堆積土出土遺物間には大きな相違も見られず、しかも両者の間には接合関係の認められるものもあることから、両者の間には大きな時間の隔たりはないものと考えられる。したがって、ここではこれらの遺物を一括して扱うこととする。

第3号住居出土遺物には土師器坏・碗・甕、須恵器平瓶があるが、ここでは土師器坏を中心に編年的位置付けを考えてみたい。

土師器坏は、概して口径に対して器高が低い皿状のものが多く、体部内外の段が明瞭で口縁部が直線的に外傾し、丸底を呈するもの③、体部外面の段が不明瞭で、口縁部が内湾気味に外傾し、平底風の丸底になるもの①・⑤と、口縁部が外反し、平底風の丸底になるもの②がある。外面の調整はいずれもヨコナデ・ヘラケズリで、内面がミガキ黒色処理されているもの③⑤と、ミガキのみのもの①②とがある。また、これらの図示した遺物の他に7点の体部から底部にかけての破片があり、これらは体部外面に明瞭な段をもち丸底を呈するもの2点、体部外面に緩やかな段をもち平底風の丸底を呈するもの2点、段をもたず平底になるもの3点というような内訳となっている。また、これらの外面の調整はいずれもヨコナデ・ヘラケズリで、内面はすべてミガキ黒色処理されている。

このように、土師器坏は出土数が少ないにもかかわらず多様な様相を示すが、内黒を呈する土器に関していえば、これらは段が明瞭で丸底を呈するもの、段が不明瞭で平底風を呈するもの、段をもたず平底のものが混在しており、栗田式～国分寺下層式（氏家：1957）の中に位置付けることができる。

これらと類似する土器群には、本遺跡の南東約1kmの塩沢北遺跡第2群土器や名取市清水遺跡第VI群土器（丹羽・阿部：1981）、仙台市郡山遺跡第390号住居・第394号土壇出土遺物（木村・長島：1984）がある。

塩沢北遺跡第2群土器では坏は、口縁部が外反せず、内湾気味のものが多く、体部外面に明瞭な段や沈線状の段がめぐり、底部は丸底を呈するものを主体に平底風の丸底のものを一部含むというものである。

清水遺跡第VI群土器は、すべて丸底を呈するものの体部下半に段や稜を持つものや、そのまま緩やかに推移するものなど様々な形態を見ることができる。しかし、量的に少ないことから、それらがどのような比率で構成されるかは不明である。またVI群に続くと思われる、清水遺跡第

VII群土器は段や稜を持つものはまったく見られず、底部も平底のものを主とし、丸底風のもの若干含む程度となっている。

また、郡山遺跡第390号住居・第394号土壙出土の土器は、底部の丸みが弱く外面の段は明瞭であるが内面の段が不明瞭なもの、緩やかな段や沈線状の段が体部の下端にあり極めて平底に近いもの、外面に段・稜をもたず丸底のものなどがあり、それらが同程度の比率で構成されている。

これらと本遺跡の土師器坏を比較すると、まず塩沢北のものはすべての土器に段もしくは段状の沈線をもつ点、平底のものが見られない点では本遺跡よりも古い段階のものと考えられる。次に清水VI群、郡山遺跡のものとの比較では、本遺跡の坏が体部に段をもたず平底風のものが比較的多く見られるという点ではこれらと若干異なるものの、清水VII群のように有段丸底が全く見られなくなるような段階にまでには至っていない。土師器坏の無段平底の増加傾向については時間の変遷の中で捉えられることから（古川：1984）、本遺跡のものは塩沢北第2群土器よりも新しく、清水VI群・郡山390住、394土壙とほぼ同時期かまたは若干新しい程度で、清水VII群までは下らないものと考えられる。その年代は塩沢北第2群土器が7世紀中頃～後葉に、清水VI群・郡山390住、394土壙が7世紀末～8世紀前葉に、清水VII群が8世紀中頃にそれぞれ位置付けられていることから、第3号住居の出土遺物のものは7世紀末～8世紀前葉と考えられる。また、これらと供伴する須恵器平瓶や在地系の土器とは異なる特徴を持つ①についても同様の時期と考えられる。

さらに、1、2、4、5号住居の出土遺物も第3号住居出土遺物と似た特徴を示すもので、これらも7世紀末～8世紀前葉に位置付けられよう。

[土壙について]

土壙は形態面から前述した4タイプに分類することができた。以下それらの性格について若干の考察を加えてみよう。

aタイプは出土遺物もなく、堆積土の状況もしまりのないもので、時期を限定することはできない。また、堆積土には炭化物を多く含む層が認められるが、壁面には火熱を受けた痕跡はなく、土器焼成遺構や炭窯跡とも考えにくく、性格については不明である。

cタイプのものは、斜面の中腹に並んで存在すること、第8号土壙から六道銭と考えられる寛永通宝が出土していることから、近世の墓墳であると考えられる。

dタイプは出土遺物もなく時期を限定することはできないが、類似した土壙は町内の長峰遺跡（菊地：1981）など多くの遺跡から検出されており、縄文時代の落とし穴と考えられる。

bタイプについては、性格は不明である。

[住居について]

住居は調査区内から合計6軒確認された。これらの中で第6号住居は出土遺物の形式の相違があり、第2、4、5号住居間には重複がみられることから、同時に存在した可能性のあるのは第1～3号住居の3軒と考えられる。3軒の住居は標高95m前後の等高線に沿うように分布しており、同じ高さで存在していたことになる。

本遺跡と同様に丘陵頂部から端部にかけて全面調査された大和町中峰A遺跡（菊地：1985）でも頂部の平坦面を取り囲むように南～西斜面で17軒の平安時代の竪穴住居跡が検出されている。今回の調査区は丘陵の北東斜面のみで、丘陵頂部や南～東の斜面については未調査であるため集落の全体的形態については不明であるが、本遺跡も中峰A遺跡に類似する集落構成をしていた可能性がある。なお、掘立柱建物跡は出土遺物もなく時期は不明である。

最後に集落の性格について考えてみる。

本遺跡の立地する円田盆地は弥生時代以降、水田開発が永続的に行われた地域であるが、台遺跡（前掲）などでは盆央よりも盆地に臨む沢筋を中心に微傾斜を利用した水田が耕作されている。また同遺跡では沢の北に張り出す小丘陵上に集落が存在したと考えられている。

これを本遺跡に照らし合わせれば、今回の調査区の北側は盆地に向かう沢が流れ入江状の地形をなしている部分があることから、本遺跡の住人はこのような地形を耕作地として利用していた可能性もあろう。

VI まとめ

1. 堀の内遺跡は円田盆地南西部の高木丘陵東麓の北東斜面に位置している。
2. 遺構は、東区から南小泉式期の竪穴住居跡1軒と、西区から7世紀後半～8世紀前葉の竪穴住居跡5軒・掘立柱建物跡1棟（時期不明）・土壙12期が検出された。

竪穴住居跡はいずれも平面形は方形で、床面から4本の支柱穴と2本の支柱穴、周溝が認められている。

土壙は、いくつかのタイプに分類され、その中で性格の分かるcタイプは近世の墓壇、dタイプは縄文時代の落とし穴の可能性はある。

3. 出土遺物には、第1～5号住居から7世紀後半～8世紀前葉の土師器（甕・坏）、須恵器（平瓶）の他に、第6号住居から南小泉式の土師器（甕・坏・甗）や表土から縄文土器、弥生土器の小片がある。
4. 今回調査した部分は、遺跡の北東部分にあたり、全体の範囲はさらに南西に広がるものと考えられる。

引用・参考文献

- 相原 淳一 (1989) 「諏訪館前遺跡」蔵王町文化財調査報告書
- 伊東 信雄 (1960) 「古代史」宮城県史 第1巻
- 氏家 和典 (1957) 「東北土師器の型式分類とその編年」 歴史第8輯
- 太田 昭夫 (1980) 「大橋遺跡」東北自動車道遺跡調査報告書IV 宮城県文化財調査報告書71集
- 小川 淳一 (1980) 「塩沢北遺跡」東北自動車道遺跡調査報告書III宮城県文化財調査報告書69集
- 菊地 逸夫 (1985) 「中峰A遺跡」中峰遺跡調査報告書 宮城県文化財調査報告書108集
- 菊地 淳一 (1981) 「長峰遺跡」仙南・仙塩広域水道報告書 I 宮城県文化財調査報告書79集
- 木村・長島 (1984) 「郡山遺跡VII」仙台市文化財調査報告書64集
- 黒川 利夫 (1980) 「赤鬼上遺跡」東北自動車道遺跡調査報告書III宮城県文化財調査報告書69集
- 齊藤 吉弘 (1989) 「台遺跡」宮城県文化財調査報告書131集
- 齊藤 吉弘 (1989) 「戸の内脇遺跡」宮城県文化財調査報告書131集
- 蔵王町 (1985) 蔵王町史 第1巻
- 丹羽・阿部 (1981) 「清水遺跡」東北新幹線遺跡調査報告書V 宮城県文化財調査報告書77集
- 古川 一明 (1984) 「色麻古墳群」宮城県営圃場整備等関連遺跡調査報告書

写 真 图 版

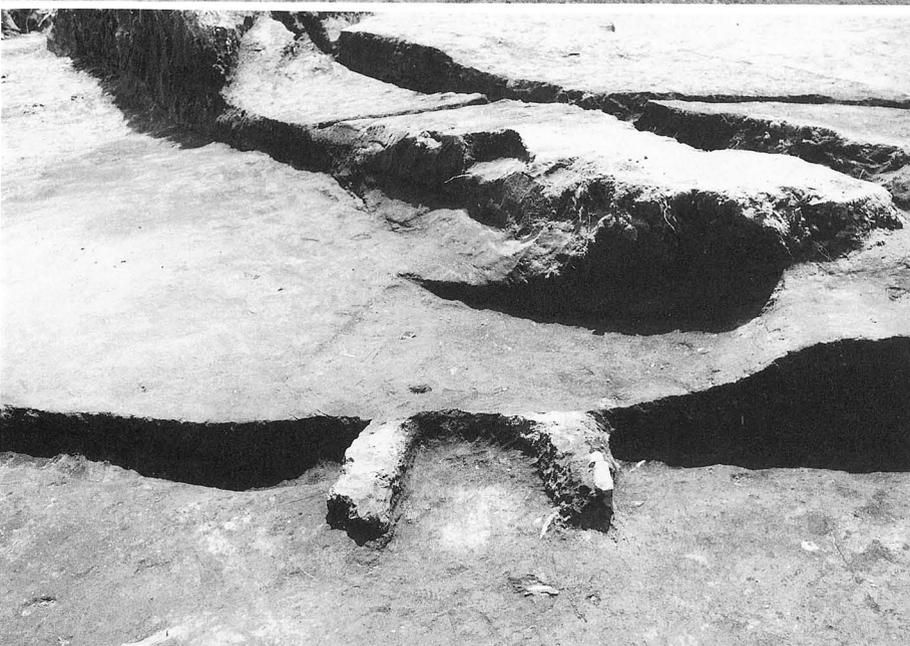
西調査区全景



第1号住居跡

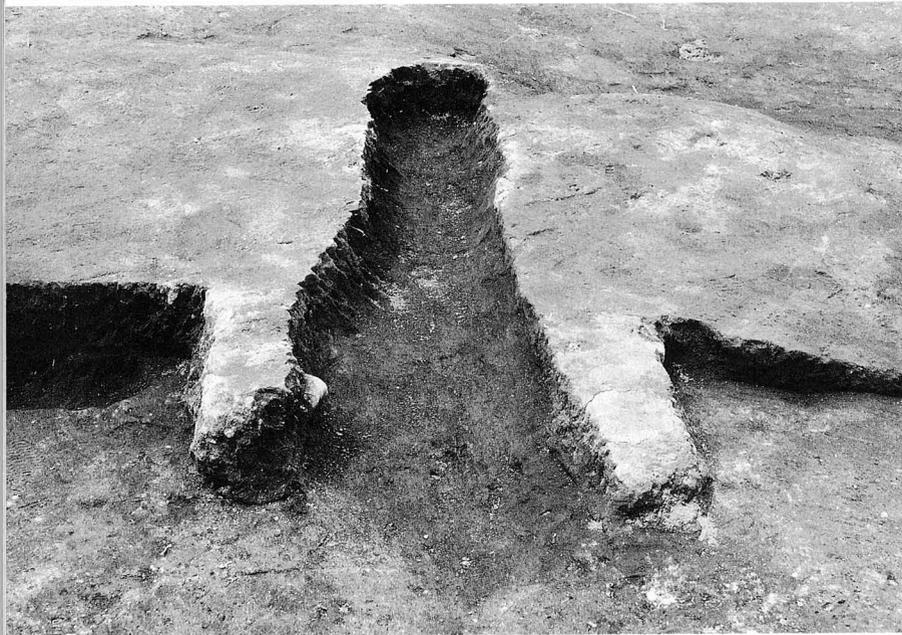


第1号住居跡カマド

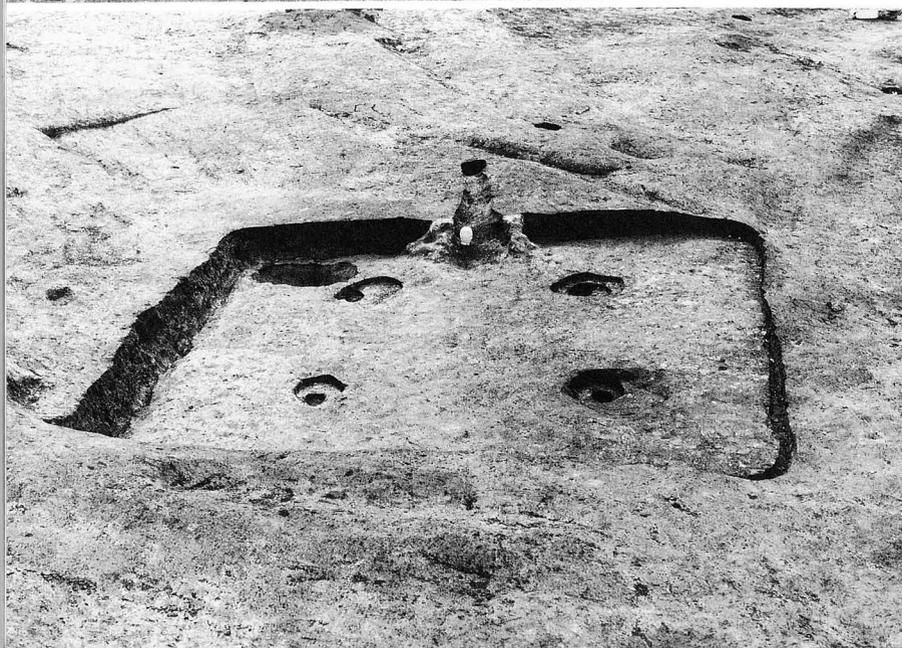




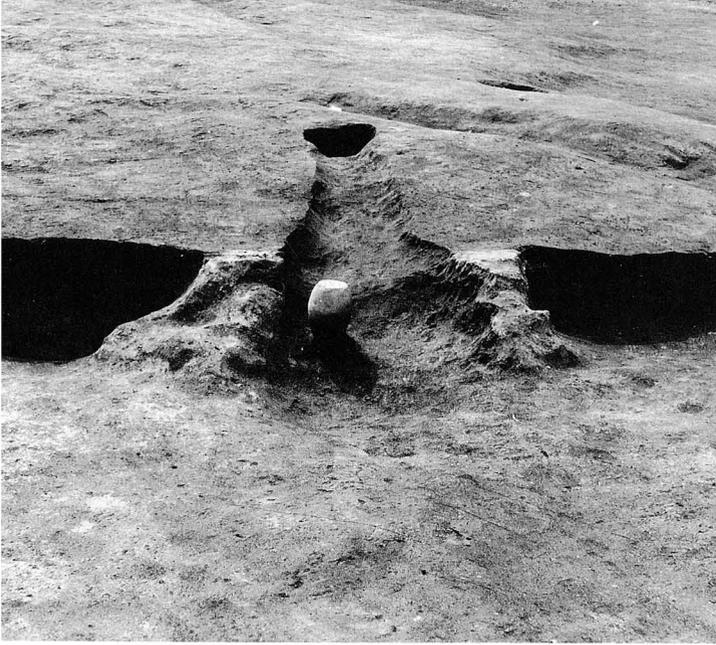
第2号住居跡



第2号住居跡カマド



第3号住居跡

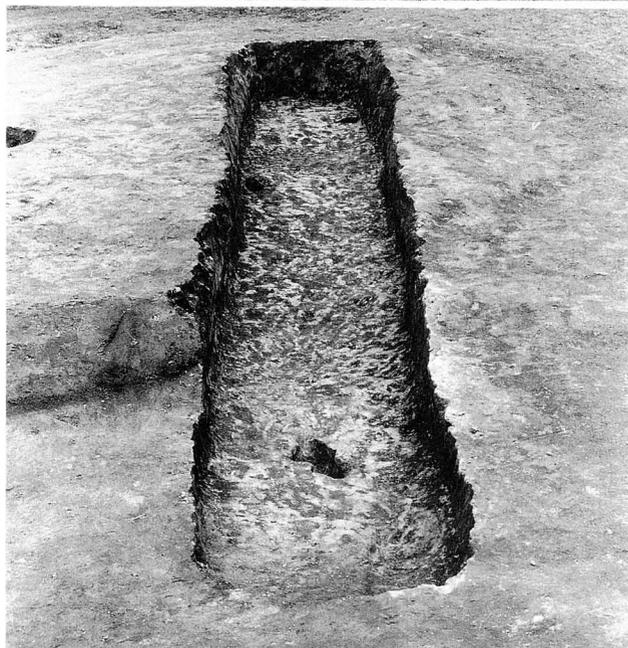


(上右) 平瓶出土状態
(上左) 第3号住居跡カマド

第1～3号土壇



第4号土壇





第11号土壌



第12号土壌



4 図



7 図-8



8 図-4



8 図-1



8 図-7



8 図-8

図版-4 堀ノ内遺跡出土遺物

蔵王町文化財調査報告書

堀ノ内遺跡

平成2年3月26日印刷

平成2年3月30日発行

編集・発行 **蔵王町教育委員会**

宮城県刈田郡蔵王町大字円田字西浦北10

T E L . 0224(33)2211

印刷 **株式会社 東北プリント**

仙台市青葉区立町24-24

T E L . 022(263)1166
